

今週の為替相場見通し(2019年4月22日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		111.77 ~ 112.17	111.86	111.00 ~ 113.00
ユーロ	(ドル)		1.1226 ~ 1.1324	1.1248	1.1100 ~ 1.1400
(1ユーロ=)	(円)		125.67 ~ 126.81	125.85	123.00 ~ 127.00
英ポンド	(ドル)		1.2978 ~ 1.3119	1.3000	1.2900 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	145.30 ~ 147.00	145.49	145.00 ~ 148.00
豪ドル	(ドル)		0.7137 ~ 0.7206	0.7154	0.7065 ~ 0.7215
(1豪ドル=)	(円)	*	79.89 ~ 80.72	80.04	79.00 ~ 82.70

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 綱島 正佑記

(1) 今週の予想レンジ: 111.00 ~ 113.00 円

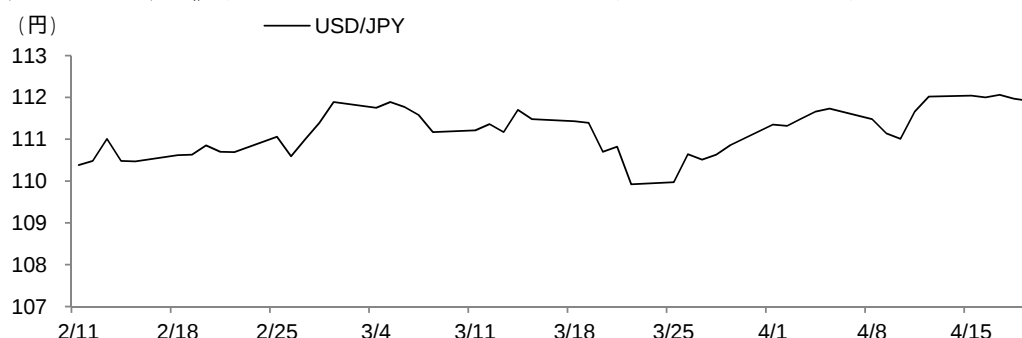
(2) ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週のドル/円相場は111円台後半を中心に狭いレンジ内での値動きとなった。週初15日、111円台後半で取引を開始。先週末のリスクオンムードを引き継ぎ株価が上昇するもドル/円相場は112円台では上値重く、112.00円を挟んで揉みあい。翌16日、日米貿易交渉の結果を控えていたことや、また豪州準備銀行(RBA)議事録の結果を受け豪ドルが売られる展開に豪ドル/円も連れ安となり、ドル/円も111.85円まで小幅下落。その後の日米貿易交渉も材料とはならず、むしろ堅調な株価の値動き等を受け欧州時間にかけては反発し再度112円台を回復。17日、引き続き良好なリスクセンチメントを背景にドル/円は堅調に推移し、東京時間午前には一時112.17円まで上昇し年初来高値を更新したが、その後は積極的に上値を追う展開とはならず公示仲値決定の時間に合わせて反落し、再度112.00円近辺で膠着。18日、株価が下落したことを受けドル/円は軟調推移し、欧州時間入り後に発表された欧州4月PMIが予想を下回る結果となるとリスクセンチメント悪化からユーロ/円が下落。連れてドル/円も週安値となる111.77円まで下落。しかしながら、その後北米時間に発表された米3月小売売上高が予想を上回ったことを受けて112.02円まで反発。19日イースター休暇となり閑散となる中、動意にかける展開が継続し111.86円で越週。

今週・来週のドル/円は底堅い展開を予想。欧州PMIシリーズの結果等、景気減速が懸念される指標結果はあったものの、米小売売上高も予想対比良好な結果となったことに加え、これまでに発表されている米決算は総じて良好な結果となっており、株価は堅調に推移している。今週・来週には米決算発表が多く予定されており、良好な指標やこれまでの決算発表動向を踏まえ、良好な決算結果が期待される。また、26日(金)、27日(土)には日米首脳会談が予定されているが、先週の日米貿易交渉後の市場の反応も限定的であったことや、世界経済減速が一部で話題に上がっている中で、あえてリスクセンチメントを悪化させる様な発言等が出されるリスクは低いと考える。また、来週5月2日(木)東京時間未明にはFOMCが予定されているが、スタンスを大幅に変えるとは考え難く、引き続きハト派な姿勢を維持するものと考え。その様な環境下、堅調な株価の推移は継続し、ドル/円相場は良好なリスクセンチメントにサポートされ、底堅い推移が継続しよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き: 安値 111.77 円 高値 112.17 円 終値 111.86 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.1100 ~ 1.1400 123.00 ~ 127.00 円

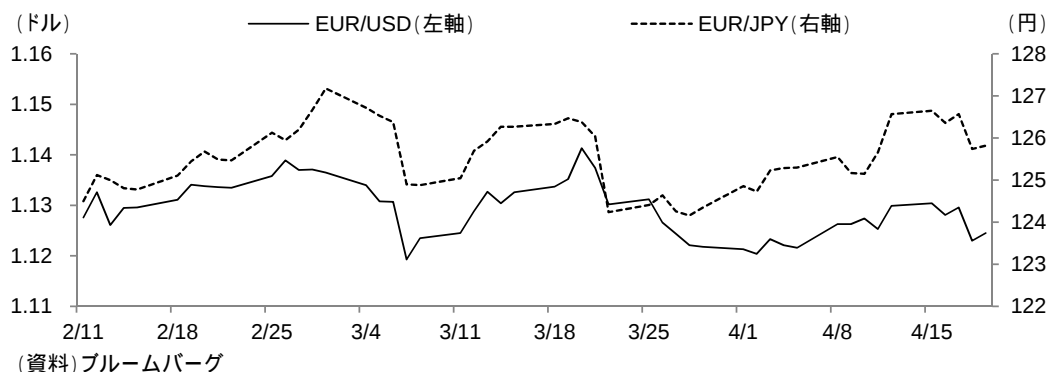
(2) ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に下落した。週初15日に1.12台後半でオープンしたユーロ/ドルは1.13台前半まで値を上げたが、株式市場がマイナス圏へ下落する展開に1.12台後半まで連れ安となった。16日はヘッドラインに浮沈する展開。「ECB政策理事会で少数の理事がECBの経済見通しは楽観的過ぎると見ている(関係筋)」と伝わると1.12台後半まで値を下げたが、その後「ECBはさらなる利上げを議論しておらず、マイナス金利階層化についても消極的」との報道を受けユーロは買い戻される。しかし、「英国の保守党と労働党がブレグジットを巡る話し合いで行き詰まっている」との報道で再度1.12台後半まで下落した。17日は良好な中国経済指標にリスク選好ムードが強まり、欧州株が堅調に推移する中、一時週高値となる1.1324まで値を上げた。しかし、その後はドイツ政府が2019年の成長見通しを引き下げたことが伝わると1.12台後半まで反落。18日はユーロ圏(ならびに欧州各国)の4月製造業PMIが軒並み予想を下回り、欧州景気の先行き不透明感への懸念が高まる中、一時週安値となる1.1226まで急落。19日はイースターで海外が軒並み休場となる中で1.12台半ばまで緩やかに上昇して引けている。

今週・来週のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想する。先週のECB政策理事会では金融政策の現状維持を決定。今後の金融政策についてはマイナス金利の階層化に関して消極的な姿勢が示されている。マイナス金利の階層化は今後の将来の利下げのシグナルと捉えられかねない懸念があり、それへの消極姿勢が確認されたことでEUR相場は上昇するなど市場では一定の安心感が醸成されているものの、欧州域内のPMIの結果は軒並み市場予想を下回る結果となるなど、欧州経済への懸念が改めて浮き彫りになっている状況。EUR相場の根幹とある経済の“ままならない状況”が垣間見える中、そして出口の見通せないブレグジットへの懸念が燦々の中、短中期的には直近のレンジ下限(1.12)のブレイクを警戒すべきだろう。そんな中、今週は月末週、そして週初はイースター、その後本邦が10連休となる。本邦政府・日銀は“連休中、市場が急変すればすぐに対応できるよう体制を整える”としており、年初のような相場の急落の蓋然性は乏しいと思われるが、相場の流動性が低くなる局面かつ月末ということで、フロー主導での相場の急変も懸念されるタイミング。ドル/円ならびにその副次的影響を受けるユーロ/円を中心に相場への注視は怠れない。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.1226 高値 1.1324 終値 1.1248
(対円) 安値 125.67 高値 126.81 終値 125.85



3. 英ポンド

欧州資金部 北原 亘

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3200 145.00 ~ 148.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週の英ポンド相場はイースター休暇を控え、重要なヘッドラインが見られない中、小動きの展開。週初15日は、英議会がイースター休暇入りしたこともあり静かな1日。前週にEU離脱期限が延長され、目先の合意なき離脱が回避されたとの安心感が漂う中、やや買いが優勢だった。翌16日、英11~2月平均週間賃金は、市場予想と一致し前年比+3.5%。約10年ぶりの大幅な伸びとなったものの、市場予想通りであったことからポンドの反応は限定的だった。その後、英ガーディアン紙が「コービン労働党党首が、政府とのEU離脱協議が行き詰ったと発言。政府と労働党の間で、関税同盟・環境問題・労働者権利についての合意はなし。」と報じると、英ポンドは下落。すぐに労働党の報道官が否定したものの、上値が重いまま値を戻せずに引けた。翌17日、英3月消費者物価指数は、食料品価格の下落等を主因に市場予想を下回り英ポンドはじり安となった。翌18日は、外的要因により弱含む展開。独4月製造業PMIは44.5、4か月連続での50割れとなったほか、ユーロ圏3月総合PMIは51.3、予想に反して下落するなど、あらためて欧州経済の鈍さが意識された。下落幅を広げるユーロに、英ポンドも連れ安。英3月小売売上高は前年比+6.7%、市場予想対比で上振れ、約2年半ぶりの大幅な伸びとなったものの、前年の寒冬による落ち込みからの反発との整理からか、買いは続かなかった。その後、米3月小売売上高が市場予想を上回るとドル買いが進み、英ポンドは一時1.30割れ、上値が重いまま木曜日の取引を終えた。

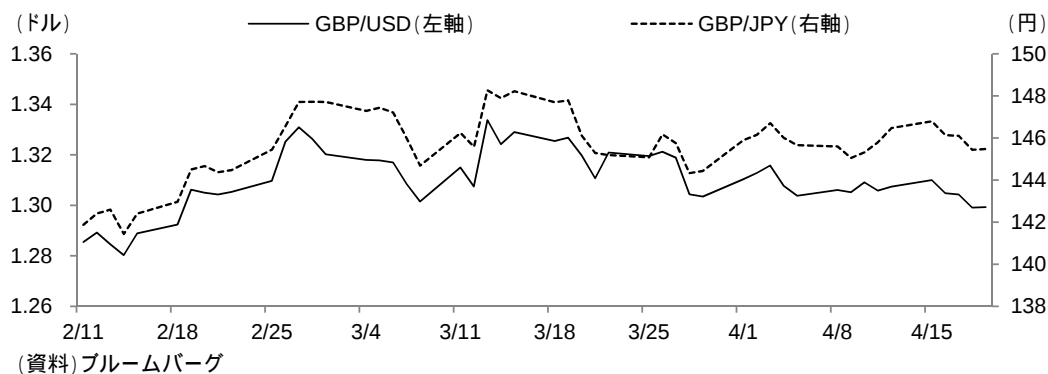
今週、来週の英ポンド相場は、底堅く推移し上値を探る展開を予想。EU離脱協議については、先週16日に労働党報道官が今週に与野党会合を実施すると発言している。イースター休暇が明け、関税同盟残留に関する議論が本格的に再開されると思われる。ただし、差し迫った期日が特段ない中、何かすぐに結論が出るとも考え難く、まずは5月の地方選・欧州議会選を見据えたスケジュール感での駆け引きが続くだろう。市場もそれを見越してか、ボラティリティは低下したまま反発は鈍く、やや楽観的ムード、安心感すら漂っているように感じることから、英ポンド相場は底堅さを維持するだろう。欧州議会選については先週、一部の世論調査が公表された。そこでは、2016年の国民投票時にEU離脱を推進した英国独立党の元党首、ナイジェル・ファラージュ氏が旗揚げしたばかりの「ブレグジット党」が早くも1位の支持を集めている模様。メイ首相は、欧州議会選への参加を回避したい意向だが、与野党間での早期妥協が見込まれない中、世論動向にも注目しておきたい。5月2日(木)には、英中銀金融政策委員会が予定されているが、上記の通り、消費者物価指数は目標をやや下回る水準で推移しており、ハト派を維持する口実は十分、現状維持が継続するだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2978 高値 1.3119 終値 1.3000

(対円) 安値 145.30 高値 147.00 終値 145.49



4. 豪ドル

為替營業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 0.7065 ~ 0.7215 79.00 ~ 82.70 円

(2) ポイント【先調の回顧と今調と来調の見通し】

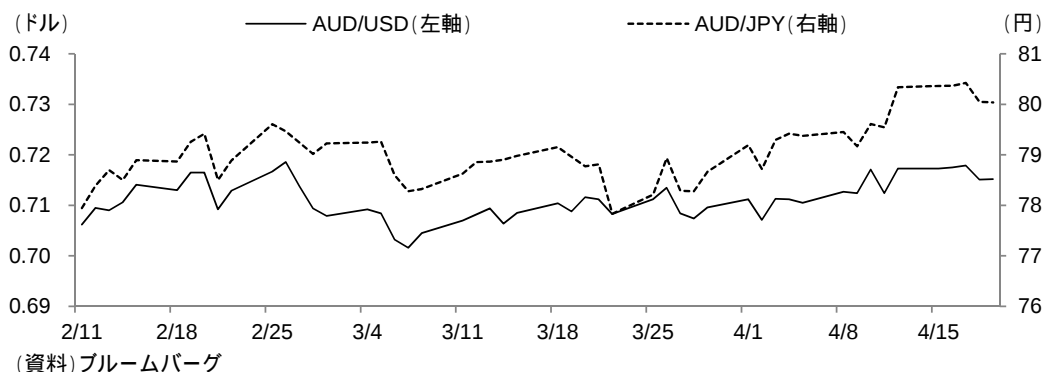
先週の豪ドル/ドル、豪ドル/円相場は、週半ばに上昇する場面も見られたが、週末にかけては戻り売られた。週明け15日、0.71台後半でスタートした豪ドル/ドルは1日を通して狭いレンジ内で揉み合い推移。北米時間に発表された米国の主要な経済指標は良好だったものの、豪ドル/ドルの下押し圧力は限られた。豪ドル/円についても、80円台前半で方向感なく推移した。16日、0.7170台で推移した豪ドル/ドルはRBA議事録公表後、一時0.7140まで下落。内容としては、利下げの確証はないとしながらも、「利下げが適切となるシナリオについても議論」との部分が一時的な楽観を醸成した。ただし、米国時間、企業決算はまちまちだったものの、株式相場の底堅い値動きに80円台を割り込んでいた豪ドル/円が80円台前半まで反発。豪ドル/ドルもそれに連れ高となり、結局、下落直前の水準まで戻る下に向って来いの展開となった。17日朝夕、ニュージーランドのCPIが事前予想を下回ったことを受けたニュージーランドドル下落につられ、豪ドルも0.7150まで一時的に軟化。しかしながら、その後に発表された中国1~3月期GDPならびに同3月鉱工業生産がいずれも事前予想比良好な結果となったことから、豪ドル/ドルは急反発。一時、0.72ちょうどを上抜け、週高値となる0.7206まで上伸した。豪ドル/円についても、中国経済指標発表後に80円台前半から80円台後半まで急伸。一部では、本邦企業による豪州企業の買収報道もサポート材料となったとの声も聞かれた。ただ、一段の買い材料がない中で、戻り売り圧力も強く、豪ドル/ドル、豪ドル/円ともに上昇前の水準まで反落した。18日、東京時間では底堅い推移を見せていた豪ドルだが、欧州時間に、イースター休暇を前にしたポジション調整のドル高地合に豪ドル/ドルは週安値となる0.7137まで軟調に推移。豪ドル/円についても80.40円台から80円割れの水準まで下落した。19日、豪州がイースター休暇に入ったため、豪ドル取引についてもやや閑散となり豪ドル/ドルは0.71台半ば、豪ドル/円は80円台前半で横這い推移し、欧米各国も休暇のため、同水準のまま越週した。

今週、来週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。米中通商交渉に関するポジティブ方向のヘッドラインに対する感応度は下がって来ており、貿易摩擦を背景とした中国経済の減速懸念の後退に関しても、既に豪ドル相場への織り込みが相応に済んでいると思われることから、豪ドルのアップサイドの余地は限定的であると見込む。目先、目立った材料がない中では、豪中銀の金融政策の方向性が意識されることが想定され、先週のRBA議事録に対するプライスアクションを見る限りにおいても、ダウンスайдへの警戒感が相対的に高そうだ。したがって、上がったところは売りが控えているような展開を想定する。オーストラリア自体の経済指標としては24日(水)豪1～3月期消費者物価指数、26日(金)豪1～3月期生産者物価指数、同輸出入物価指数等が発表される。また、5月の第1週には、米国でFOMCならびにISM景況指数、雇用統計等の重要イベント・経済指標が控えており、発表直後には神経質な値動きとなることも予想される。それら米経済指標が弱含んだりFOMCでのハト派姿勢が鮮明になれば、一時的な豪ドル高となろうが、結局、RBAもハト化を余儀なくされるはずで、同局面での上昇は持続しないと考える。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/15～4/19)の値動き:

(対ドル) 安値	0.7137	高値	0.7206	終値	0.7154
(対円) 安値	79.89	高値	80.72	終値	80.04



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。